

プールの花体系におけるオダマキ* 「スワンの恋」を中心に

阪村 圭英子

はじめに

『失われた時を求めて』には百種類近くの花々が描かれている。なかでも、コンブレーのサンザシ、オデットになじみの菊、カトレヤはあまりにも有名である。ここでは、これまでほとんど注目されることのなかったオダマキの花について考察したい。じつはオダマキは小説のなかにただ一度しか登場しない。けれども、小説展開のうえで無視できない役目を負っている。しかもこの小さな花は、小説以外のプールのテキストには相当数現れていて、この花に対する作家の偏愛が証拠立てられる。オダマキの文化的背景や象徴をも視野に収めながら、プールがこの花に示した特別な関心を探ってみたい。

スワン氏のオダマキの花束

オダマキが『失われた時を求めて』のなかで唯一登場するのは、「スワンの恋」の一節である。オデットを恋人にしたスワンは、ある夜、夕食会へ出かける身支度をしながらも、彼女のことを思い続け、その魅力を身近に感じながら馬車に乗り込む。プールは、スワンの恋心をあたかも彼につきまとう愛玩動物であるかのように描く。「彼は馬車に乗ったが、この彼女への思いも、まるでペットのように同時に馬車にとび乗って、彼の膝の上に座っているかのように感じた。彼は、それを愛撫し、それで体を温め、けだるさのようなものを感じつつ、首筋や鼻孔をけいれんさせる軽い戦慄に身をゆだねたが、それは初めて経験する戦慄であり、オダマキの花束をボタンホールに挿しているときのことであった¹⁾(RTP, I, p.265)。」

スワンが衿にオダマキの花を挿したときに初めて感じた「軽い戦慄」とはいったい何であろうか。それはヴェルデュラン夫人のサロンに登場したフォルシュヴィル伯爵に対する警戒心と不快感が無意識に発現したものと考えられよう。伯爵の存在は、オデットのスワンへの愛情をおびやかすものになったからだ。スワンが彼女のために苦痛を初めて味わったのは、ヴェルデュラン家に遅く到着したときすでに彼女が帰ってしまっていたあの夜のことであった(RTP, I, p.268)。スワ

* 本稿は大阪大学フランス語フランス文学会研究会(2001年9月8日)および日本フランス語フランス文学会全国秋期大会(2001年11月4日)における口頭発表をまとめたものである。

1) プールのテキストは以下を使用、*A la recherche du temps perdu*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol., 1987-1989(省略記号: RTP); *Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1971(CSB); *Jean Santeuil*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1971(JS); *Correspondance de Marcel Proust*, Plon, 1970-93(Corr.). 各引用後の括弧内に出典の省略記号とページ数を記す。本文中の引用は既訳を参考にしたうえでの拙訳である。

ンはオデットへの倦怠感が生まれるのを恐れ、あえて若いお針子と逢っていたために遅れたのだ。しかし彼は、予想もしなかったオデットの不在に驚き、狂ったように夜の巷を探し回り、ようやく彼女を見つける。そしてこの事件をきっかけに、二人は「カトレヤ」の関係、つまり恋人の関係に入る。ところがフォルシュヴィルの出現は、このような平穏な愛情関係にくさびを打ち込み、スワンの嫉妬が始まる。オダマキの花束がボタンホールに挿されて以降、スワンには悲しみと苦しみだけが残される。オダマキはいわばスワンの幸福な時代と不幸の時代を分ける地点にあらわれることになる。

この花の選択がまったく恣意的でないことは、タイプ原稿の段階でこの部分について、「オデットの思い出をこめて彼がもっていたオダマキの花束」と書かれていたことでわかる（RTP, I, p.1218）。オダマキはカトレヤや菊と同様、オデットにゆかりの花であったようだ。じっさい初期の草稿ではオダマキがオデットに結びつけられていたことがプレイヤード版の注で指摘されている。カトレヤがオデットの花として登場するのは、ブルーストが1910年末に青年期の自作『つれない男』を再読した後、1911年タイプ原稿に加筆したときのことである²⁾。それまでの草稿では、オデットには菊の花が関連づけられていたようだ³⁾。ところが、それ以前にはオダマキが彼女の花であり、それを示唆する痕跡は削除されたものの、なおこの一カ所にブルーストがこの花の名を残したことは注目に値するのではなからうか。

それでは、オダマキとはどのような植物なのだろう。オダマキ（ancolie）はキンポウゲ科に属し、その花の色は青、紫、白、黄、赤など多様である。ancolieの語源は中世ラテン語の「アクイレギア」aquilegiaで、これは「アクイレグス」aquilegusつまり「水を集める」という意味から来ている。オダマキの花の距に集まる分泌物にちなむ命名のようである。西欧文化のなかでオダマキはまず第一に宗教的な意味あいを持つ。葉が3つにわかれていることから、キリスト教の伝統のなかで三位一体の象徴とされ、また、その花の形が鳩にも似ているので、コランピナとも呼ばれていたオダマキは、精霊をあらわすものとされた。中世以来、宗教画、特に聖母子像には、しばしばオダマキが描かれている。たとえばヒューホー・ヴァン・デル・フースの祭壇画「羊飼いの礼拝」のガラスの花瓶に挿されたオダマキがある。また、ルーヴル美術館にあるレオナルド・ダ・ヴィンチの「岩窟の聖母子像」の背後にもオダマキが描きこまれている。注意しないと見落としそうなほど慎ましい存在だが、オダマキはキリストの霊性をあらわし、聖母のアトリビュートのひとつになった高貴な花である⁴⁾。

2) RTP, I, p.1192 (notice), pp.1205-1206 (p. 218, note 1) 参照。

3) RTP, I, p.1205 (p.216, note 3) 参照。

4) オダマキに関しては以下を参照。Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Publishing Company-Amsterdam, London, 1974-1976, p.108. Anne Dumas, *Les Plantes et leurs Symboles*, Editions du Chêne, 2000, pp.98-99. Mirella Levi D'Ancona, *The Garden of the Renaissance*, Leo S. Olschki Editore, Firenze, 1977, pp.105-108.

メランコリーの花と「美の教師」モンテスキウ

ところで、キリスト教の象徴体系の文脈とはちがうところで、オダマキにはもう一つの明確なコノテーションがある。それはフランス語でオダマキをあらわす「アンコリー」*ancolie*が「メランコリー」*mélancolie*と韻を踏むことから、憂愁の感情を表すとされることだ。二つの語は、語源的にはまったく異なる語形から生じているが、三音節五音素までが同一のいわゆる完全押韻であるため、文学的伝統のなかでオダマキの花にメランコリーの感情が付与されしばしば用いられた⁵⁾。

ブルーストのオダマキが、詩人口ベール・ド・モンテスキウに多くを負っていることは明らかである。ブルーストがモンテスキウに初めて会ったのは1893年4月13日であった。詩壇の大物であり、ダンディな貴族であり、博識な審美家であったモンテスキウに、たちまちブルーストは魅了された。たとえば『ジャン・サントウイユ』において、彼はモンテスキウの実名をあげ、花々について、この詩人の語ることばや彼のボタンホールに挿された花からいかに多くのものを学んだかを述べている (*JS*, p.332)。

とりわけ1893年に発表されたモンテスキウの詩集『かぐわしき香りの長』は、数々の花の名前を連ねた詩編を集めたもので、大きな人気を博した。詩集を贈られたブルーストは同年6月25日モンテスキウに丁寧な礼状をしたため、その後もたびたび書簡でこれを話題にする。この詩集には何度かオダマキが登場する。第4章「暗い花々の道」には「アンコリーはメランコリーの花」と題した詩が含まれている⁶⁾。「われらの悲しみの鉢から生えた弱々しい植物、このメランコリックな妹であるオダマキにおいて、父なる神の怒れる手も、われらの病に対して幼児のようなやさしさを示す。」この詩は、ルネサンスのイタリア画家ベルナルディーノ・ルイニの描いた「バラ園の聖母子」を題材に取ったものであり、その絵のなかで幼児キリストが花鉢から生えた青のオダマキを握っている。

同じ詩集の、「紫の花々は眠りの部屋の花々」で始まる詩編では、紫色を帯びたさまざまな花、つまりオダマキをはじめ、スマレ、パンジー、アネモネ、藤、ヘリオトロープ、アイリス、リラ、などを集めている⁷⁾。この大半はまたブルーストの好んだ花だ。花の趣味に関してブルーストはモンテスキウと非常に近い距離にいたと言えるであろう。さらに、「選ばれた場所」と題された別の詩編では、「花はオダマキにクジャクシダ、夢想とメランコリーがそこに最初にやってきた」とうたわれている⁸⁾。これら三つの詩編では、オダマキがメランコリーと韻を踏むような関係にあり、モンテスキウが紋切り型の比喻に固執していたことが分かる。ブルーストも当然これには気がついていただろう。

とは言え、ブルーストは、モンテスキウから文学的オダマキについてのみ学んだわけではない。彼が絵画を話題として、モンテスキウとラスキンを比較する場

5) たとえば Rabelais は *Gargantua* の第9章で同音語の洒落として *l'Ancolie* と *mélancolie* を指摘している。 *Œuvres complètes*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1994, p.29.

6) Robert de Montesquiou, *Le Chef des Odeurs suaves*, Richard, 1907, p.341.

7) *Ibid.*, p.336.

8) *Ibid.*, p.356.

面にオダマキがあらわれる。ブルーストは1904年に刊行した『アミアンの聖書』翻訳版序文となる論考「ジョン・ラスキン」において、いわゆるラスキンの偶像崇拜を批判する。そのなかで、花が一例としてとりあげられている。「ラスキンならティントレットのある絵の中に描かれたのと同じ花と言うであろうが、我々の同時代人ならレオナルドのあるデッサンに描かれた花と言うであろう。(彼は我々に多くの事を明らかにしてくれたが、なかでも、今でこそ誰もがその話をするものの、彼以前には誰も眺めはしなかった、ヴェネチアのアカデミア美術館にあるあれらのデッサンを教えてくれたのだ。)(CSB, p.137)」

名前をあげてはいないが、この同時代人とはあきらかにモンテスキウを指すものと思われる。それでは、モンテスキウが初めて注目したというレオナルドのデッサンとはどの作品を示すのだろうか。レオナルド・ダ・ヴィンチの植物デッサンでヴェネチアのアカデミア美術館に所蔵されているもののうち、もっとも有名になったのはスマレを筆頭とする小花の習作である⁹⁾。注意して見ると、スマレやバラ科の花や稲科の植物の穂にまじって、一輪のオダマキが描かれている。これが問題のデッサンであると確認できるのは、さきほどのブルーストの草稿に、「そのデッサンのなかに一本のオダマキを見た」と書かれているからだ¹⁰⁾。もう一つの証拠は、『失われた時を求めて』において、ジルベルトの編んで肩にたらしめた三つ編みの髪がレオナルドの小花の習作に比較されているという事実である(RTP, I, p.494)。「芝草の細やかさ」を持ち「建築の唐草模様の葉飾り」に喩えられた三つ編みが「楽園の芝生」で編まれているのは、三つ編みに似た稲科の植物の穂が聖母マリアの花であるオダマキやスマレに囲まれているためであろう。

また、オダマキは、モンテスキウが1905年に出版した『美を天職とする人々』にも登場する。この芸術論集に強い感銘を受けたブルーストは、同じ年に論考「美の教師」を執筆した。ブルーストはここでモンテスキウが言及したルーヴル美術館にあるピサネッロの『エステ大公妃の肖像』に強い関心をしめしている。モンテスキウが指摘するとおり¹¹⁾、この肖像はたくさんのオダマキの花に取り囲まれている。「ルーヴルへ行くと、モンテスキウ氏は、ピサネッロの作品の前で、あなたがたが恐らく気づかなかった花々がその肖像画の背景にあることを教えてくれる。花について私は何を言えよう？これこそ、私たちのぼんやりした知覚が一般論にしかたなく甘んじていることを示している。モンテスキウ氏はすでにあなたにオダマキの名を教え、それがどのように実物そのままに描かれているかを指摘した。(CSB, p.515)」

このあとラスキンが絵に描かれた花々の種類を同様に確定する記述が続く。このように「美の教師」においては、モンテスキウとラスキンは花について語るとき、典拠を文学作品のみならず絵画の片隅にまで探し出す一級の審美家として同列に並べられている。ブルーストはたしかに彼らを偶像崇拜的な傾向をもつ人物

9) この絵について加藤靖恵氏が2000年度春季日本フランス語フランス文学会で言及している。

10) CSB, p.769, note 1参照。

11) Robert de Montesquiou, *Professionnelles Beautés*, Juven, 1905, p.202.

として批判していた。しかし、少なくとも普通の人なら気づかないような美を教示するという点で、審美家としての貴重な存在価値を彼らに見いだしていた。オダマキはそのような美のあらわれの一例としてブルーストの関心をひきつけたのであった。

文学の花、レニエとフランス、そしてブルーストのオダマキ

オダマキに注目したのはモンテスキウだけではない。オダマキはシャトーブリアン、ゾラなど他の作家たちの作品にも登場するが、ブルーストが若い頃愛読した二人の作家、アナトール・フランスとアンリ・ド・レニエにもオダマキへの言及がある。

アナトール・フランスの小説においては、オダマキは、ブルーストの根幹的主题に関わるような文脈で使用されている。この花が登場するのは、ブルーストの愛読書であった『シルヴェストル・ボナールの罪』(1880年)であるが、この小説は「コンプレー」の草稿においては、ベルゴットの文体がもつ魅力を示す例にされている。博識な主人公ボナールは、路傍で見かけたオダマキの花と虫との出会いに目を奪われ、日記に書きとめる。オダマキは華やかでありながら、沈んだ風情の気高く清らかな花として描写されている。そこにマルハナバチが蜜を求めてやって来る。蜂は花に潜り込んででもすぐには蜜に到達できず、やがて花冠を食い破り蜜を吸う。マルハナバチの智慧にボナールが驚き感心する場面である¹²⁾。

ここでオダマキは、宗教的あるいは文学的な比喻を離れて、科学的な観察の対象になっている。このマルハナバチと花の関係は、ブルーストが『ソドムとゴモラ』で華々しく展開するマルハナバチと蘭の出会い、すなわち同性愛者どうしの出会いの場面の遠い源泉だとは考えられないだろうか。ブルーストは、たんに審美家として花を愛したわけではない。子供時代から書物に描かれた花々に強い関心を寄せ、ダーウィンやメーテルランクやメチニコフの博物学的、生物学的作品を読んでいた。そのブルーストがフランスの記したこのオダマキの一節を記憶していないわけはなからう。

一方、アンリ・ド・レニエは詩集『いにしへのロマネスク風詩編』のなかでオダマキに言及しているが、ここでとりあげたいのは、ブルーストがレニエの文体をオダマキに喩えていることである。ブルーストはレニエの詩的散文のパステルシュを創作しているが、のちに「レニエの文章は長く伸び、明確になり、身をくねらせ、オダマキのように沈んだ風情の細密なものとなる。」と記述している(CSB, p.306)。花茎が長く伸びて、いくつもの花卉が曲線を描くように開花するオダマキのイメージは、レニエの文章の精髓とみなされている。ブルーストがこの花を高く評価していたことが指摘できるであろう。

ブルースト自身は、『楽しみと日々』(1896)の「イタリア喜劇断章」のなかで、すでにオダマキの名を登場させている。花瓶に盛られた「誇り高くておやかな姿、雄弁なしぐさ」と描写される花々、バラ、蘭、紫陽花などのなかにオダマキも含

12) Anatole France, *Œuvres I*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1984, pp.286-287.

まれている (JS, p.48)。

さらに『ジャン・サントウイユ』ではオダマキが重要な場所にあられる。ジャンが休暇で滞在しているエトウイユの町で、マリアの月に教会の祭壇に飾られた花々を見る場面だ。「夕食後しばしばマリアの月に行ったものだった。祭壇にひしめきあっているのは、薄紫色のまがりくねった小さなヒヤシンスの花であり、茎に沿って高価な薄い布をアップリケのように張り付けた幅広い花びらの〔オダマキ〕であり、それらの色といえば、どれも人間や動物の世界や町の中では見られないものである、[...]」(JS, p.320) ももちろんこれはコンプレのサンザシを予告するエピソードである。ここではサンザシではなく、ヒヤシンス、オダマキ、そしてチューリップ、ベンガルバラなどがあげられている。もっともブルーストは、日没直後に表れる雲の天国の色合いにまで喩えたオダマキの名前を線で消し、代わりの花の名前は書き込まずに空白にしたままだ。これらの花の特徴は、現実世界を超越したような美しい色彩であり、アール・ヌーヴォー好みの優美にうねる形態である。

ブルーストはまた、書簡にもこの花の名前を残している。リュック・フレースが論文「オディロン・ルドンとエルスティールの隠喩」の中で指摘するように¹³⁾、1907年7月、エマニュエル・ビベスコ宛の手紙で、ビベスコ兄弟が所有していたルドンの絵について書いている。「あなたがたと過ごしたその夕べのひとつをよき思い出にしています。私たちの出会いに気品ある証言を、その思い出には優美な枠組を与えることができます。サンリスの尖塔がない代わりに、ルドンのオダマキがありますから。(Corr. VII, p.219)」リュック・フレースはブルーストがビベスコ家を見たルドンの絵、「花々、赤のパネル」の思い出を残すために、初期の草稿でオデットの花としてオダマキを選んだのではないかと推測している。いかにブルーストがこの花に興味を持っていたかが、この書簡の例からも指摘できる。

こうしたオダマキのブルーストにおける意味を確認したあとで、ふたたびスワンがボタンホールに挿すオダマキの花束に戻ろう。男性のボタンホールの花というテーマを、ブルーストは繰り返し用いている。前述したように、ブルーストは、モンテスキウのボタンホールに飾られた花を見て、その美に開眼したと語る。当時はエレガントな男性たちは衿に花を挿す習慣があった。それらの花は一種の自己主張であり、他者に自分の存在と魅力をアピールする記号だった。『楽しみと日々』と『ジャン・サントウイユ』には数々の花がボタンホールに挿されている。

『失われた時を求めて』でも、いたるところにボタンホールの花が現れる。每晚衿に飾るために、みずから花を選んでいったスワン (RTP, I, p.192) 以外にも、たとえば、シャルリュスがボタンホールに挿しなおしていたモスローズがある (RTP, II, p.111)。パルベックで金持ち息子が毎日背広に蘭の花を飾る (RTP, II, p.38)。また老齡のサガン大公が社交界に最後に登場した時のクチナシ (RTP, III, p.119)。アルベルチーヌのために語り手が挿すバラ (RTP, III, p.127) などが列挙

13) Luc Fraisse, « Odilon Redon et les métaphores d'Elstir » in *Proust et ses Peintres*, Editions Rodopi B.V., Amsterdam-Atlanta, GA 2000, p.74.

できる。ブルーストが様々な花々から選びぬいたこれらの花のなかで、スワンのオダマキだけが、可憐な野の花の風情はあるものの、一輪では注目されにくいため花束にされている。他の男性たちの派手な花に比べて、ボタンホールに飾る花としては、一風変わった個性的な選択がなされていると思われる。

ブルーストがここでオダマキを登場させる理由のひとつに、オデットとの恋に疲れたスワンが田園を思い浮かべるのであるが、その場面を導入する役割をこの花に与えているとも考えられる。オデットがいるパリを離れられないスワンが郷愁をいだくのは、コンプレー近くの彼の庭園で、そこにはアスパラガス、ワスレナグサ、グラジオラス、バラ、スグリなどの春の植物が描かれている。『ジャン・サントウイユ』では、オダマキがエトウイユの教会の祭壇をかざる美しい聖なる花として一度は書き込まれていたことを思えば、コンプレーに咲く花々を先導する役目もふさわしいといえるであろう。

もちろん、メランコリーと強い関連がある文学的伝統が、もっとも重要な役割を負っていることは明らかである。恋敵の出現に苦悩するスワンが選ぶ花としては、メランコリーを象徴するオダマキは最適の花だ。ちなみに、シェイクスピアの『ハムレット』第4幕では、狂気に陥ったオフィーリアが王妃たちに捧げる花々のなかにオダマキがあり、「不義」や「忘恩」をあらわすとされている。オダマキの花の距が角のように突き出ているため、「妻が不貞を働いた夫、つまり寝取られ男には角が生える」という昔からのことわざを踏まえている¹⁴⁾。ブルーストはもちろん『ハムレット』を読み、『失われた時を求めて』の中でも言及している。裏切るかもしれないオデットへの嫉妬に苦しめられていくスワンに、オダマキを選ばせるのは、やはり妥当な選択だったといえよう。

ところが、この花がかつてはオデットの思い出をこめていたならば、スワンが走る馬車のなかで、その花束をボタンホールにとめながら、感じた軽い戦慄に別の意味を見いだすことができる。最初の「カトレヤする」場面において、同じく揺れる馬車のなかで彼がオデットの胸からはずれかけたカトレヤの花々を«fixer»とめよう(RTP, I, p.229)と差し込む行為とこのオダマキの花束を«en fixant»とめる行為が、呼応していると考えられる。

それならば、オダマキの花に触れることではじめて知る、首筋や鼻孔をけいれんさせる「軽い戦慄」とは、きわめてエロチックな意味をもっているのではないだろうか。スワンは馬車に乗る前からオデットのことを考えていた。彼女への想いは、彼の意のままになる生き物のように彼につきまとう。馬車のなかで、スワンはそれを膝に乗せ愛撫し、そのぬくもりで自分の体を温め、そして戦慄とけだるさを感じる。その一連の行為の間、オダマキの花束をボタンホールに差し込んでいるのは、かつてのカトレヤの行為へのほのめかしと考えられないであろうか。

カトレヤを挿しながらスワンがふるえつつ望んだのは、モーヴ色の花卉の間から女を所有するという特別な新しい快樂であった。それに対して、オダマキをと

14) Ad de Vries, *op. cit.*, p.108, ハンス・ビーダーマン、『図説世界シンボル事典』、八坂書房、2000、p.79を参照。

めながら彼が身を委ねる戦慄とは、恋敵が出現した愛人を欲望する新しい感覚だ。オデットと出会う前のスワンは、女性たちとの交際で苦しみを知らずにきたのに、今やまったく未知のやるせない戦慄が彼の首筋や鼻孔をふるわせる。ひとりであるときも、彼女への執着心から「カトレヤの行為」が蘇り、スワンを襲う。

なるほど、このようにカトレヤと比較するにはオダマキはあでやかさに欠けるささやかな花である。しかし、これまでみてきたようなプールのこの花への深い関心を考慮すると、馬車のなかでスワンの手が触れる花として選択されたオダマキにはカトレヤに劣らぬ存在価値が見いだせよう。スワンという人物像にさりげなく添えられたこの小さな花には、彼のオデットに対する苦悩と肉欲が顕在化されているのではないだろうか。

結論

スワンがボタンホールに挿したオダマキは、ライヴァルの出現でオデットとの愛がおびやかされるという、嫉妬と破局の予想を含んだメランコリーの象徴となっている。同時にその花の描かれかたから、カトレヤがもつ官能性も喚起する。プールは、彼が敬愛した作家たちからオダマキの意匠を学んだ。この花には、ある種の聖性、メランコリーの感情、世紀末に好まれた装飾性という重層的な意味合いがこめられている。そのオダマキの花を、スワンの幸福期から悲恋の時期への変わり目に配置して、プロットの展開を動機づけたことは、プールの巧みな小説技法のあらわれにほかならない。プールは花々を小説の単なる飾りとして用いたのではなく、花は登場人物の審美眼や心情までもあらわす重要なモチーフであり、オダマキの花はそのような役割について多くを示唆してくれる存在なのである。

(京都市立芸術大学非常勤講師)



『花々の習作』



『エステ大公妃の肖像』